

カ所認められ、圧痛があった。神経学的所見としては、軽い意識障害が存在し、傾眠傾向。強い左片麻痺が存在した。又、左半側の知覚低下及び半側空間無視も存在した。入院時心電図は異常所見を示していない。発症約48時間後のCTスキャンでは、右中大脳動脈領域に広く低吸収領域が認められ、mass effectも強く示していた。カテテル法による右頸動脈造影を行うと、右総頸動脈は、頸椎第5椎体下縁の高さで、完全閉塞を示していた。頸部CTスキャンでは、contrast scanで第3椎体下縁から第5椎体下縁の間で右頸動脈はenhancementされず、円形に黒く抜けた像として示された。慢性期に施行した脳波及びIMPを用いたSPECTでは、右半球の機能低下、血流低下が証明されている。馬の歯は、人間の臼歯のような形をしているという。従って馬の歯が直接頸動脈に達したとは考えられず、大きな馬の口が頸部を挟み付けるような形を取り、頸動脈に過伸展、或は過屈曲、或は捻れの力が加わり、内膜に損傷を引き起こしたものと考えられる。その部に徐々に血栓化を生じたが、或は解離性動脈瘤を生じ徐々に血栓化を起し遂には完全閉塞に至ったものであろう。保存的に治療を行い、左片麻痺の回復は良好である。

## 22. Dynamic CT

### 一脳梗塞急性期に於ける検討一

野手 洋治・辻 之英 (目白第二病院 脳神経外科)  
高橋 英明  
中沢 省三 (日本医科大学 脳神経外科)

今回我々は発症後12時間以内にdynamic CTが施行し得た急性期脳梗塞の患者30例について検討を加えたので報告する。

上記30例を2群(A, B群)に分類した。すなわちA群とは、大脳基底核部梗塞(主として中大脳動脈穿通枝領域)を意味し、19症例(男17, 女2)、平均60.3才(37~83才)であり、B群とは、内頸動脈、中大脳動脈本幹の閉塞などによる比較的広汎な梗塞を意味し、11症例(男9, 女2)、平均70才(40~93才)である。

予後は発症より3ヶ月後の時点でOlasgow Outcome Scaleにて決定し、A群ではGR 12例、MD 5例、SD 2例、B群ではMD 5例、SD 4例、PVSおよびDeadが各々1例であった。

入院時(発症後12時間以内)におけるperfusion pattern: ①A群: hypo-perfusion 14例, hypo+late perfusion 3例, normo perfusion 1例, late per-

fusion 1例であった。②B群: hypo. 4例, hypo.+late. 1例, normo. 2例, late. 1例, absent. 3例であった。ANR(A/N ratio of peak value)はどの群でも大差はなかったが、RWR(rapid washout ratio)はhypo-perfusion群において、A群0.28±0.07, B群0.30と、両側共に他のperfusion pattern群と比べRWRが下がっている傾向がみられた。

入院時のCT所見とdynamic CT: A群では入院時iso-densityを示したものは16例, low densityを示したものが3例, B群ではiso. 群が8例, low群が3例であった。この中でA群のANR, RWR, が下がっている傾向がみられた。

経時的dynamic CT: A, B両群の予後の悪いgroupでは、A群ではANRの改善はみられず、一方B群ではANRの改善が悪いが、または極端にANRが高まった(出血性梗塞をおこした)症例がみられた。

## 23. 解離性右中大脳動脈瘤の1例

辻 之英・野手 洋治 (目白第二病院 脳神経外科)  
高橋 英明

くも膜下出血として発見し、その診断上及び手術時所見に興味ある知見を得た解離性右中大脳動脈瘤の1例を経験したので報告する。

症例は50歳女性で、特記すべき既往歴を持たぬ主婦であった。昭和59年12月20日に、右中大脳動脈領域広範な脳梗塞として発症し、近医へ入院す。第7病日に至り右Syivian血腫を主としたくも膜下出血併発し、昭和60年1月16日右破裂中大脳動脈瘤として当科紹介され転医となった。血管写にて右M<sub>2</sub>広範な狭窄化と、血管写直後のplain CTで右M<sub>2</sub>領域広範な造影剤の残留所見が特徴的であった。手術時所見では、色・形共にすしのネタのシャコ様の分節外観呈した右M<sub>2</sub>が特徴的であった。右M<sub>2</sub>全体を筋膜とBiobondにてCoatingして手術を終えた。術後経過順調であったが、リハビリセンター転出日早朝急性死された。剖検結果は急性循環不全とのことだった。尚解離部右中大脳動脈組織標本で、本症例の解離部は中膜であった。

さて今回演者が文献的に検討した56症例の解離性脳動脈瘤からみると、発症年齢平均は27歳と比較的若く、性差では男性が64%と若干多くなっている。発症形式をみると、解離病変末梢側の虚血病変が多く、演者例の如きくも膜下出血は稀である。解離長は多くが1~5cmで、演者例のM<sub>2</sub> diffuseも一般的であった。成因の検討では、頭部外傷が最多で、血管炎がそれに続くも、演者